

2030 SDGsで変える

若い目線 まちに活力

SDGsの17の目標を切り口に、地域の課題にどう取り組むか。甲南大学生と地元の高校生が考えるイベント「関西湾岸SDGsチャレンジ」(主催=甲南大学、朝日新聞社メディアビジネス局、後援=神戸市、堺市、和歌山市、徳島市、岡山市)が7月から11月にかけてあった。甲南大(神戸市東灘区)の大学生と高校生が5チームに分かれ、自治体を担当。現地への調査をしながら議論を深め、解決策を探った。11月3日、甲南大で発表した。

地域コミュニティが衰退する中、人の結びつきをどう保つか。岡山芸芸館高校と甲南大学の計8人のチームは解決のヒントとして「全ての人に開かれたコミュニケーション」であるアートに着目した。

商店街 アートでにぎわい

岡山市

調査すると、商業施設付近は通行者の数が多いのに対し、商店街はその半分以下。一方、店舗と利用者との間にコミュニケーションが生まれるなど、市民が交流する拠点として活用できる強みがあることに気づいた。

最後に8人が解決策として提案したのは、「ファーム」のスタッフを講師に迎えた工作大会を開催すること。様々な立場の人が交流しながら、作品を空き店舗に展示するなどして商店街に来る人も増やせると考えた。



発表する岡山チーム=11月3日、甲南大

徳島市

少子高齢化が進む中、地域の祭り文化をどう支えるか。日本各地で共通するこの課題に、徳島市立高校の生徒と甲南大の学生、計8人が取り組んだ。

祭り紡ぐボランティアを

ティアが祭りを支えているという意識が若者に浸透していない。長期、安定的にボランティアを育成するシステム設計が必要だ」と話した。



地域の祭り文化の継承について議論するメンバー=7月17日、甲南大

に興味があると答えた人は約6割に上った。甲南大マネジメント創造学部1年の谷口美実さんは「若者が伝統文化を紡いでいける可能性は十分にあると分かった。考えているだけでなく、現地で話を聞いて視野が広がった」。



神戸市都市局の担当者から話を聞く参加者=8月25日、神戸市役所

神戸市

公共交通のあり方を考える課題に取り組んだ。現状を知ろうと、8月9日に神戸市と、市内などでバスを運行する神姫バスの担当者から説明を受けた。

複雑な三宮に「道しるべ」

数が伸び悩んでいることや、都市部の路線で混雑が深刻になっていることなど、意外と知らない問題が多くあることに驚いた。



「生きごみさん」の講習を受ける堺市チームのメンバー=8月24日、堺市、甲南大提供

堺市

市立堺高校3年の神林優希さんは「根拠を明確にして提案することが大切」。甲南大マネジメント創造学部3年の近藤いぶきさんは「知識だけでなく人の声を聞くこと」。

「コンポスト」各小学校に

生産から消費、廃棄に至る過程で、資源消費と廃棄物を減らす「サーキュラー(循環)エコノミー」の考え方を地域でどう実践していくか。

合った。

9月にあったSDGs関連の市のイベントではブースを構え、来場者にアンケートした。生きごみ分別への意識や「生きごみさん」を体験してもらって感想を尋ね、案を募った。

和歌山市

シーグラス拾って知って



友ヶ島の海岸に漂着したごみを調べたメンバー=8月12日、和歌山市

和歌山市沖には友ヶ島と呼ばれる無人島群がある。甲南大生と市立和歌山高校の生徒に示された課題は、そこに流れ着く海洋ごみ問題だ。

島。だが、ほとんどの人が海岸に漂着する大量のごみについては知らずに帰ってしまふという現状にも気づいた。チームは改めて問題を「知ってもらう」ことの大切さを感じた。そこで注目したのが海岸に落ちていたシーグラス(波に削られた瓶やガラス片)だ。観光客が拾ったシーグラスを入れてもらう参加型アートを、啓発の看板とあわせて島に設置することを提案。県立和歌山工業高校の協力も得て、廃材などから実際に箱を製作した。

◇この特集は高井里佳子、田中雄一郎、田部愛、松岡大将、矢田文が担当しました。